

宇電懇ニュース

宇宙電波懇談会事務局発行
(名古屋大学理学部)

目 次

- | | |
|------|-------------------------|
| I. | 宇電懇拡大運営委員会のお知らせ |
| II. | 第12期宇電懇運営委員会委員選挙結果 |
| III. | 運営委員会および総会(5月12、13日)の報告 |
| IV. | 宇電懇に何が期待されるか (田原 博人) |
| V. | 事務局からのお知らせ |

I. 宇電懇拡大運営委員会のお知らせ

野辺山宇宙電波観測所で開催されるNROユーザーズミーティングにおいて、下記のように宇電懇拡大運営委員会を開きます。

7月16日(水)	12:00~(昼食時)	於 ユーザーズミーティング会場
議 題	今後の宇電懇のあり方	

これからの宇電懇をどうしてゆくのかを考える第一歩にしたいと思っていますので、年長者、若手を問わず、多く層の方々のご参加をお願いします。

II. 第12期宇電懇運営委員会委員選挙結果

委員長	田原 博人	30	委員	1	石黒 正人	26
	次 石黒 正人	13		2	福井 康雄	23
				3	平林 久	17
					稲谷 順司	17
					長谷川 哲夫	17
運営委員(委員長を含めて10名)				6	森本 雅樹	14
は、9位4名が同票であったため、				7	小川 英夫	13
13名が当選となりました。				8	海部 宣男	12
なお、委員長票は委員票に加えて				9	林 正彦	8
あります。					川口 則幸	8
					笹尾 哲夫	8
					井上 允	8
(投票人総数61名)			次	13	小杉 健郎	7
					大師堂 経明	7

III. 運営委員会および総会（5月12、13日）の報告

1. 学術会議天文研連に「天文学長期計画小委員会」が設置され、21世紀に向けた天文学の展望に関する議論が開始された。（稲谷氏より報告）
2. 国立天文台の理論共通専門委員会のもとに計算機小委員会が設置された。委員を宇電懇から推薦することにした。（近田氏より報告）
3. 「今後の宇電懇のあり方」について
田原委員長よりこれからの宇電懇のあり方についての問題提議がなされた。（詳しくは本ニュースIV参照）この問題については今後1年間かけて議論を行ない、結論を出すことになった。
4. 事務局および会費について
上記のような状況のもとで、今年1年間は名古屋大学が継続して事務局を担当することにした。また、会費は従来どおり2年間分徴収することにした。

IV. 宇電懇に何が期待されるか

宇電懇に何が期待されるか

—宇電懇の解体か再生か—

宇電懇運営委員長 田原博人

一昨年、淵野辺の国民生活センターで開催された、宇宙電波懇談会20周年記念シンポの際、“宇電懇のあり方を再検討してみてもはどうだろうか”と提案して以来、運営委員会や宇電懇総会の席上など、機会がある度に見直し検討を提案してきたが、まだまだ会員全体の共通話題になっていない。今年の春季天文学会のおり開催した宇電懇総会では、今後1年をめぐりとして宇電懇のあり方を検討することになった。この小文は問題点を再度指摘し、今後の検討の一助としたい。

まず結論的に述べるなら、最近の宇電懇が組織として停滞してきている理由として、現状のような活動の必然性が無くなったのではないかということである。

宇電懇発足当初以来、懇談会は下記の主旨のもとに運営され、大きな成果を得てきたことはご承知のことである。

宇宙電波懇談会（発足1970年5月）

性格：宇宙電波に関心のある研究者の自主的組織

目的：宇宙電波研究の交流・推進をはかる

活動：各種のシンポジウム・討論会・研究会の組織、将来計画、研究費等
宇宙電波研究にかかわる活動を行う。

組織：毎年1回（原則として）春の総会を行う。

全会員の選挙によって10名の運営委員を選出する。運営委員の任期は2年とする

まわりもちで事務局を設置する。原則として2年ごとに事務局を移す。

研究者の自主的な組織は当時の天文学界においては、極めて新鮮なものであった。電波天文学といった体制化されていない学問分野だからできたともいえよう。しかしこのことは、当時東京天文台を中心とする体制側にとっては望ましいものではなく、徒党を組むやからにうつっていた。ただ組織を作るだけでは徒党をくむという批判は当たったかも知れないが、天文学にかかわる研究会はもちろん、将来計画の推進においても精力的に活動し、成果をあげてきた。

ところで現状はどうであろうか、将来計画の目玉であった大型電波望遠鏡は、45mと5素子干渉計となって10年前に実現し、懸案であった電波ヘリオも今年度完成し、初期の目的は達成された。

東京天文台が国立天文台へと組織が替わるだけでなく、以前とは比べものにならないぐらいに大きな意識改革がなされた（と思う）。国立天文台の運営にも外部から委員が参画し、全国の研究者の意向を反映でき、共同利用の実をあげつつある（十分かどうかの評価は別として）。宇電懇以外にも研究者集団が発足しそれぞれ活発に活動している。もはや天文学界にとっては宇電懇が考え進めてきた観点は、国立天文台（もちろん野辺山電波観測所も含め）を中心に日常的となり、宇電懇の革新性はなくなってきた。電波天文学が体制化されたともいえる。

こうした状況の中で宇電懇はどのような存在であるべきであろうか。もちろん現在VSOP、VLBI関連の計画が進んでおり、将来計画としては大型ミリ波干渉計やサブミリ波を柱としたスペースへの発展が予想され、その実現に責任をもって取り組む必要は当然であろう。ところが現実をみると、宇電懇全体の組織的な動きは不十分である。将来構想に於てこのような状態であるので、宇電懇の運営自体になるとなおさらである。もっとも宇電懇は電波研究者にとって空気の様なもので、あらためてその存在を意識することはなのかもしれないが。

野辺山電波観測所の共同利用で研究が満たされ、各研究機関もそれなりに充実し、通総研鹿島、東京大学、名古屋大学、早稲田大学、鹿児島大学は自前の装置のことで手一杯、全体に気を配ることは二次的になってきたのかも知れない。

もちろん現状の宇電懇でいいのではないかと考えるであろうが、いたずらに維持するだけの組織であってもしかたがない。VLBI懇談会が発足していることから、宇電懇は解体して、別途LMA懇談会のようなものを組織することも考えられる（宇電懇は解体しないでゆるやかな組織として存在することもあるかも知れないが）。あるいは、従来のタイプの研究者組織と異なった新しいものを創造し（よい手本も見あたらないので具体的ではないが）再生をはかることも考えられよう。

各研究機関において、自分達の研究との関連で、どのような組織と役割が期待されるか考えてほしい。今年の野辺山ユーザーズミーティングの際に、検討の機会を持つ予定にしているので、多くの方々の熱心な討論を期待したい。

宇電懇発足当初においても、年長者もいたが、宇電懇自体を引っ張っていたのは、当時20代、30代の研究者であった。当時に比べ平均年齢が上がったといえ、現在でも活躍の中心はそこになければならないと思う。若手の奮起を期待したいところである。

V. 事務局からのお知らせ

本ニュースIIIでもご報告したように、本年度も名古屋大学理学部が宇電懇事務局を務めさせていただくこととなりました。よろしくお願いいたします。

・宇電懇会費について

天文学会春期年会時の総会で決定されましたように、会費は例年どおり2年分（2000円）をお収めいただきたいと思います。

同封した振込用紙でお近くの郵便局で振り込んでください（手数料はいりません）。また、7月15-17日に野辺山で開かれますユーザーズミーティングで事務局の窓口を設けますので、そこで直接納入していただいても結構です。ご協力のほどよろしくお願いいたします。

口座番号：名古屋 5-66724

加入者名：宇電懇事務局

宇宙電波懇談会事務局

〒464-01 名古屋市千種区不老町

小川英夫

名古屋大学理学部物理学教室A研

福井康雄

Tel : 052-781-5111(内6657) または 052-781-6769(直通)

水野 亮

Fax : 052-782-0647